

---

# orzの魔法使い

反自律(= ` ' =)

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

orzの魔法使い

### 【Zコード】

N1175Z

### 【作者名】

反自律(=、'、'=)

### 【あらすじ】

しょーもない性格のチートな大魔法使いにひるわれた青年が一方的に振り回されるだけのおはなし。

連作短編として気まぐれに書き下ろしていく予定。

1  
いきだおれ。

二九〇

「つま先で蹴つても返事がない。

ただのしがはねのようだ

11

二二

۱۵۰

しかばねにはまだ早すぎたようだ。

殘念

セーかく活きのよい生体素材がケントできたと思ったのは……

しかたがない  
二口以ムでモ呴ムで運はせるが

主に、わたしの暇つぶしとかに

— 11 —

八

卷之三

うわあっ！

「三日三晩の昏睡から目覚めたばかりだというのにお元気そうでな  
によりますお客様。とても拾われたとき、全身表面積の三分の一以  
上を凍傷におかされ肺炎も併発していたとは思えない回復ぶり。  
さすがはご主人様。完璧な治療処置でございました」

あああ  
あんた

ヤマガの批評

な、なんで木の人形がしゃべっているんだ？！」

「こきなりの大声はまだまだお体にお障りになりますのでご自重くださるようお願いいいたします。

次にご質問にお答えしますと、わたくしはご主人様にメイドとして制作されたウッドゴーレムなので所与の機能として日常会話能力もデフォルトなのですがなにか？

最後に備考としていわせていただきますと、表情筋こそないものの、わたくし、その内面は十代の乙女として設定されています。したがつて、初対面の方からそのように不躊かづ化け物を見るような視線で注視されると少なからず傷ついてしまうのだということを僭越ながら」報告させていただきます

「あ……いや、すまん。

よくよく思いだしてみると、おれつて凍死しかけたところを救われてここにいるんだよな……。

メイドだかウッドゴーレムだか知らないが、助けてくれた人にいきなりあんまりな態度をとつたり大声を出したりしたのは、どう考えてもおれが悪かった。

謝らせてくれ

「お気になさらず。

わたくしの製造者でもあるご主人様からわたくしに遭遇したときに想定される一般人の反応についてもひとつおりレクチャーされておりましたので、傷つきはしましたがそれでも想定の範囲内の反応ではありました

「その……今更だが、助けてもらつた礼もいいたい。あのまま森の中に放置されていたら、凍死か野獣に食われるか……いずれにせよ、おれ確實に死んでいたはずだ」

「そちらのお礼なら、わたくしではなくご主人様におつしやるのが筋かと思います。

あなたを拾つてきたのも治療したのも、わたくしではなくわたくしのご主人様ですので」

「そうだ。

礼をいいたいのなら、このわたしに存分にいうがいいつー！」

「うわつ！」

「……つて、またでかい声だしたな、青年。

起きがけといい今といい、死にかけたばかりなのに随分威勢のいいことだ」

「だ、だつて……目覚めてからすぐ、いきなり木彫りの人形のどアツプから声をかけられたり、いきなりなにもない空中に人がでてたりすれば、誰だつて誰だつて驚くだろう…」

「お前さんを治療したあと、お前さんが目を覚ましたら伝えるように言い残して、この子に寝ずの番をさせていたんだよ」

「三日三晩お客様の寝顔を見守らせていただきました」

「ごめんなさい。

こんなとき、どんな表情をすればいいのよくかわからない。

それはともかく……いきなり空中からでてくるなよ

「お前さんが目を覚ましたとこの子から魔法通信が入ったので、取り急ぎ手つ取り早く魔法テレポートを使って駆けつけたわけだが……なにか問題があつたか？」

「心臓に悪い」

「ふむ。

治療したときにひととおり健康状態もチェックしておいたのだが、心臓に疾患を抱えていたとは気づかなかつたな。

「そうと聞けば放つてもおけまい。さあ、再検査だ。さつさと脱いで全裸になりたまえ。今すぐ全裸になりたまえ」

「ご主人様。

わたくしは心が乙女ですので、殿方の全裸から全力で逃げ出したく思います。この場を中座する」とお許しください

「ん。わかつた。

何かあつたら呼ぶからそれまでは部屋の外にでていなさい。最低でも一時間から三時間以上かけてしつぽりと楽しむ所存だ。

ほかのモノたちにもわたしの楽しみを邪魔するなと伝えておいて

くれ

「心得でござります」主人様

「あつ。」じり。

「きなり服を脱がそうとするな抱きつくな変なところを撫で回すなつ！」

心臓に悪いとここのにはそういう意味じゃないつ……て……。

あつ……。

ああつーつ！」

「よいではないかよいではないか。

すでに一度、全身くまなくじっくり調べたり調べられたりした仲だ。

もつとも、三日前は意識がなかつたから反応がなくてイマイチ面白味に欠けたがな

「ふう……。

行為のあとの一服は格別だぜ」

「つうひ……。

もう、お婿にいけない……」

「泣くなよ。

これがはじめてだといつわけでもないし

「そのはじめても、おれの意識がないのをいいことに、あんたが無理矢理……。

はじめてがどう」ういう以前に……ヒトとしてどうなんすか？

生きたままの人間を分解掃除するというのはつー！

「直接みて触つて嗅いで味わつた方が、手つ取り早いし確実なんだよ。

かなり細かくバラバラにしたけど、空間断層魔法を使つたから、痛みとかもぜんぜんなかつたろ？」

「と、こいつじで、まずは食事の用意をさせたわけだが。

さすがに三日間も寝たきりだと腹が空いておるだろ。遠慮なく  
喰らいたまえ

「それはいいですけど……。

すきつぱらにこきなつこんなが馳走つめこんだら、おれの腹、どうにかなりませんかね？」

「意識がない間、胃の中にチューブを押し込んで定期的に流動食を  
いれてたし、排出物も尿道カテーテルを差し込んでいたし……まあ、  
問題はなかろ。」

それに、この程度の食事なら、ここでの常態だ。この馳走のうひこ  
はいらん

「素つ頗狂になくせに随分と羽振りがいいんですね。  
ええと……その、ご主人」

「じつ見えても、大陸一の大魔法使いを自認するわたしだ。  
この程度の魔法自給自足システムや魔法自動調理システムを塔内  
に構築することは、造作もない」

「はあ……。

頭に魔法とつければ、もう何でもありますね。ここでは。

それと、ここは塔の中なんですか？」

「ああ。わたしが建造させた塔の中だ。お前さんは随分と運がいい  
んだぞ。ここは、多少の例外はあるものの、日常生活に必要なもの  
はだいたいそろつようこできてる。やつこつぶつこ、このわたし  
が造つた。

何年でも安心して引きこもれるよう」

「最後の一行為がなければ、たいへんこじ立派でいらっしゃいます。  
ところで、ここで揃えられない多少の例外ってなんですか？」

「わかりやすとこりで例をだすと、新しい衣服だな。

布地や布地を縫う機構は簡単に作れるのだが、まともな「デザイン」や配色を自動で生成させることは難しい。やつてやれることはないのだが、好みや流行というものがあるからな、あの手のものは。そのおかげでわたしは、何着も同じ服を量産して毎日それを着回しているわけだ。

基本的に魔法は、与えられた命令を愚直に実行するだけで、自身で考えたり判断したりすることが不得手なんだ。精霊魔法などは精霊が簡単な知能を備えたりしてくれるのがだが、それでも複雑な知的能力があるわけではない。せいぜいがとこ、賢い犬やカラスと同程度だな。

で、だ。

余分な衣料、しかも男性用なんて、この塔では望むべくもなし。そんなわけで今、お前さんの服、今着せている寝間着しかないから

「今、さらつとなんか重要なこといわれた気がするよつ！」

つていうか、もともとおれが着ていた服があつたはずでしょ。あれ、どこやつちやつたんですか？」

「ぼろぼろだつたし汚れきつて不衛生だつたしで、塔の中に置いておきたくないんで捨ててさせた」

「さりげなく酷えよ！」

長旅で草臥れていたとはいえ、あれでもおれの一張羅だったのに

……

助けてもらつてこりうして食事に招いてくださることには感謝しますが……おれ、なに着てここを出て行けばいいんですか？」

「そういうや、まだまだ衣服は高価なんだつたな。外では、布や糸もまだまだ手工業で生産しているはずだし……。

お前さんの衣服に関しては、とりあえずあとで手配することにしよう。

それよりもお前さん、なんだつてこんな雪深い時期に、着の身着のままの軽装あんな深い森にひとりで入つてたんだ？

見たところ、自殺願望があるようにも見えないし……」

「い、いろいろと事情つてもんがあつまつして……」

「そりゃ。」

わたしはまた、てつきり、酒場で安酒かくらつたあげく馬鹿な賭でもしてその場の勢いで考えなしの軽舉に及んだのかとか思ったが、違つたのか

「ぎくつ！」

「ときにお前さん。

聞きづらうことがあえて尋ねるが、ここを出たあと、こゝあてはあるのかい？

いやなに。三日も寝ていたと聞かされてもやけに落ち着き払つているから、少々気になつてな。仕事とか家庭とかがあるのなら、もう少しあわてて外に連絡を取らうとするもんだが……お前さん、そんなんのもなかつたろ？

「ぎくつ！」

「まともな職も帰るあてもない風来坊かい。

そんなふうたいではあると思つていていたが……つむ。

そいつは、重畠

「な、なにが重畠なんすか？ ひとの不遇を。

なんか、非常に嫌な予感しかしゃがらねーんですけど……。

あ。それと、住所不定は確かですが、職業は冒険者です。おれ、無職ではないつす

「冒険者なんてのは、職にあぶれた行き場のない流れ者がなるもんだ。あまり胸をはつて名乗れる職業ではないだろ。なんの生産活動にも従事していないし、世間一般的にはアンダーグラウンドすれすれの存在ではないか。少なくとも、堅気と見なされることは少ないな。

そういうことは……ふむ。

あえて確認をせてもらつが、当然、今回の救助活用に必要とされた経費を支払えるだけの蓄えもないわけだな？」

「ぎくつ！」

「そいつはもういいって。

なに、そう萎縮するもんでもないさ。

お前さんの格好をみれば、甲斐性がありそうにもないのは容易に想像がつくし、もとより期待もしげいなかつたし。

わたしは本職の医者というわけではないが、わたしがお前さんが意識を失っていた間に施された治療は、この世界の医療水準を遙かに凌駕した超最先端魔法治療だつたのだからな。

おいそれと値段をつけられる代物でもないし、無理にでも対価を金銭に換算すると、下手すれば小さな国のふたつみつば買えるほどになる。

ん？ どうした？

田と口をまん丸にして。

せつかく用意させた食事だ。冷める前に食べないと、味が落ちるぞ

「い、いえ……。

なんかもう……展開が想定外すぎて、ビックリアクションしたらいいかわからんねーっていうか……。

はあ……。

おれ、どうにも大変な人に拾われちまつたみてえーだ……。

気分はもう、どうにでもなーれ、つと……」

「ぶつくさ情けないひとりじとをいつているところすまないが、はなしを先に進めさせてもらうぞ。

要約すると、お前さんは田下、いくあても帰るあても、職や家族はもとより、もちろん、治療費を支払えるだけの金もない、つと。

「いまでは、あつているな？」

「え……ええ。

まあ……そいつすね

「ふむ。

それではひとつ、提案があるので……

「…………どうして、」「うなつた？」

「襲いたかつたら、遠慮しないで襲つてもいいんだぞ？」

「あとが怖いから、襲いません」

「そうか？ まあ、わたしはどうちでもいいんだが。

わたしの塔を維持するための仕事は、わたしが造つたり廻遊したモノどもに任せておけば十分なのでな。

お前さんにできる仕事といえば、せいぜいこれくらいなものだ。おかげで…………ふあ…………今夜は、ひさしひに熟睡できそ…………すう

「…………本当に寝ちよ、おー…………。

「これっぽっちも警戒してねーで、おれに抱きつきながら。しかしああ、おれに唯一できる仕事が、抱き枕つてのは…………なんとこうか。

ああ。うひ。

寝よ。

眠れるとは思わないが、寝よ」

3  
・いやあけて。

15

わ、笑うなつ！

「こんな服を用意したのはそつちじやないかつ！」

「ハサウエイ」

わはははははつははははつ

「なかなかお似合いになつて、ます抱き枕様」

「お前が一人で寝起きの手伝いを二〇年もやつておられる」

三木の持き物相 晴に一持き物相にありま

あはー

卷之三

はあ  
腹が痛い

こんなに笑ったのは久々

いや、お世辞ではなく似合っているぞ。

お前さん、下の方はあんなに立派だったのに、小柄で女顔だから

なあ。

それなりに様になるとは思っていたが、ふくつ。ここまでハマつ

てしまつとはくはつ。はははつははははははつー！」

「ご主人様、抱き枕様はそんなにご立派でいらっしゃるのですか？」

「おう。立派も立派。体は子供並の華奢な体格なの、それには似合

わざ、あつちの方はご立派な大人だつた！

今朝硬くなつて、一ぬのを手深りで確認してみたところ、一ぬな長

アーティストはおれで、おじいちゃんが先端のカリバ

「モードの主導」――

人にこんな屈辱的な格好させておいてさらに重ねて人を下ネタ漫

だいたいだなあ。

捨てたおれの服の代わりを揃えてくれるとは聞いていたが……なんだつておれがメイド服を着なければならないんだよつ！」「いや。ふくつ。すまん。昨日の今日でいきなり男物の服は調達できなかつたんだ。

当座は、ふはははつ。ソレで凌いでくれ。はつ。はははははつ。近いうちにまともな着替えを手配するから……

「抱き枕様の体格ですと、ご主人様の服は少々大きすぎますし、除去法でわたくしの服をお貸しするよりほかに方法がありませんでした」

「ね、寝間着を着ていればいいじゃないか。今朝まで着てたやつっ！」

「あの寝間着は来客用もので、あれ一着ありません。それにすでに洗濯中です。

抱き枕様もすでにご存じの通り、ご主人様は就寝時にはなにも身につけない方ですでの……」

「おうつ！

おかげでろくに眠れなかつたわつ！

「あらあらまあまあ。それはそれは。

「このようなときは、こほん。たしかこのように尋ねるのが作法なのですよね？」

「ええつと……昨夜はお楽しみでしたね？」

「楽しむどころか目が冴えて朝方まで寝つけなかつたわつ！」

「みるよ、この目の隈！」

「んで、夜が明けたら明けたすぐに裸にひん剥かれて屈辱的な服をあてがわれるわ逆セクハラされるわ……。

助けてもらつたことには素直に感謝するが、正直この扱いはないわ。

「外が吹雪いていなけりや、速攻で逃げ出すところだぞつ！」

「まあまあ。くふふ。そう拗ねるな。

見ての通り、今日は外に出られる状態じゃないし、朝食が終わつ

たちうちのメイドに塔の中を案内させることにしよう。

他では見られないモノばかりだし、魔法使いでもなんでもないた  
だの人間にこの塔の中を見せた前例はない。

滅多にないことだから、せいぜい光栄に思つがいいぞ」

#### 4・こあんない。

「……」ひらりが地上百三十八階になります。この階では主に……」「あのよつ」

「……鍊金術関連の実験設備が置かれ、その何割かは常時稼働もしております」

「あのように、つて声かけているだろうが。

スルーしてねーで返事ぐらいしろよ木偶人形」

「では、改めまして。

なんのご用でしようか抱き枕様」

「抱き枕、つて……まあ、いいか。

用件はいくつかあるが……まず第一に、この案内というのはいつたいいつまで続くんだ？ お前と一緒にこの塔の中をうねうねしあじめてから、かれこれ五日ほど経っているんだが……」

「そうですね。ちょうど今、予定の一割ほどを消化したくらいでしょうか？ わたくしも塔内のすべての施設を把握しているわけではありませんが、わたくしが知っている範囲に関しましてはおおよそ五分の一を案内し終えている勘定になります」

「一割……五分の一……」

「ああ。抱き枕様がよろめいていらっしゃる。

体調がすぐれないようでしたらご主人様に連絡をさせていただきますが……」

「いや、それは激しく遠慮させていただく。

あまりにも非常識なスケールに眩暈がしただけだ。

だいたい、今の百三十……何階、だつたけ？ とにかく、そんだけ高い建物があつたら近隣でも有名になつているだろうに……。

おれは、ここにくるまでこの塔の存在すら知らなかつたぞ「魔法により、外からはみえないステルス仕様となつております。また、塔ないしはご主人様に害意を持つ方は、いつさい立ち入るこ

とができません」

「……もはやなんでもありだな、魔法。

おれの冒険者仲間にも何人か魔法使いの知り合いがいるが、そこまで何でもありなやつはいなかつたつたぞ。

冒険者だから、攻撃魔法に特化したやつが多かつたからかも知れないが……」

「ご主人様は、ええ。人呼んで不眠の魔女。知る人ぞ知る大魔法使いであらせられますから。陋巷で冒険者などという職業で糊口をしのいでる雑魚雑魚しい魔法使いとは格が違います」

「なんか難しい単語列挙してさりげなく冒険者全体を貶められたよ！確かに、ろくでもないやつが多かつたし、世間的にみて肩身の狭い職業だけどよ……」

木偶人形にそこまでおいわれるほど悪いもんでもねーぞ

「そろそろ塔内の『ご案内業務に戻つてもよろしいでしょうか？』

「よろしくない。

最初にいおうとして脱線したけど、その『ご案内』とやらにも飽きたしそれ以上に疲れた。

お前のような木偶人形と違つてこつちとら生身の人間様だからな。わけのわからん魔法実験設備とかをみれられても正直、興味もなもてないし、それ以上にわけがわからん。

第一、それ以前に、毎日毎日五十階とか百階とかの階段を昇りおりさせられてみる。おれの場合は商業柄、たまたま多少鍛えているからここまで耐えられるけど、他の奴なら初日に根をあげて『

「そうでした。

人間というのは一定量以上の運動を行うと筋肉に乳酸がたまつてダルさを感じるのでございましたね。ご主人様は移動のさい、もつぱら空間転移魔法を使用していらっしゃいますし、わたくしも筋肉を持ちあわせていませんので、うつかり失念していましたわ

「そんな大事なことをうつかり失念しているんじやねーよ！

階数も非常識だが、一フロアの面積もたいがいなもんだぞ、この

塔。本当にひとつの中なか？

おれが歩き回った感覚だと、前に警護の仕事で出入りしていたかなり羽振りのいい貴族の邸宅がすっぽり収まつてまだ余るくらいに広い。

お前さんの『主人とやらは、こんな無駄に広くてでかい建物をどうやって造つてどうやって維持しているんだが……』

いや。答えなくていい。どうせ魔法で、なんだろう。

ここにいると、外の常識がどんどん音をたてて崩れていくんだよな。ガラガラと……。

吹雪が続いていなけりや、とつととの塔を出て行くんだが……

「メイド服のままで？『主人様に命を救われた恩も返さずに？』『そんなもん、どっちもどうにでもおならあ。恩を徒で返すつもりはさらさらないが、元のサヤに戻れば金を稼ぐ手段なんていいくらでもあるんだよ！

この服も、いつまでたつてもお前らがまともな服をだしてくれないからだらうが！』

『天候のせいとはい、不自由をかけてすまないな』

『うわつ！ いきなりつ！ どこからつ！』

『事後承諾になるが、お前さんの治療をおこなつた際、内耳に魔法通信末端を埋め込ませてもらつた』

『おれには選択の自由もないのかよ！』

『服装に関しては、天候が回復し次第、調達することを約束しよう』

『そのお天気のことだけよ、あんたの『大層な魔法とやらでなんとかできないのか？ なんでもありなんだろ？ あんたの魔法』

『うむ。』

やつてやれることもないのだが……天候の制御は膨大なエネルギーを消費するうえ、リスクも環境にたいする影響も、あまりにも大きすぎる。気軽におこなうことは推奨できない

『わるいが、こっちちら無学な冒険者風情でね。』

もう少し碎けた、わかりやすいいかたでないと、なにをいつて

いるのかもよくわからない」

『「この吹雪をとめようとすると莫大な金がかかる。

そつちはなんとでもなるが、万が一失敗したら数年から数百年におよぶ暴風長雨干ばつなどの天変地異を誘発しかねないから、やめておいた方がいい』

「ははは……はあ。

そいつは、まあ、やめておいた方が無難だなあ。おれの着替えていどの問題で、そこまで迷惑をかけるわけにもいかねえ。

しかし、いつまで続くかねえこの吹雪』

「まつたく、連續殺人事件が起こらないのが不思議なお天氣で「」ぞいますね』

『うちのメイドは読書家でな。

今は恋愛物にはまつているようだが、少し前までは推理物にのめりこんでいた』

「このような嵐の晩、館に足止めされた人々がひとりまたひとりと殺されていくので「」ぞいます』

「縁起でもないな。

「この塔には人間といつたら、おれとお前の「ご主人様しかいないし……順番からいってたら、真っ先に殺されるのはおれじゃないか……。」

第一……「」レムがそんなもん読んでおもしろいのか？』

『おもしろ半分に「」レムに半自立型知性を組み込んでみたが、いかんせんここではサンプルとなるヒトがいなくてな。

しかたがなく創作物を読ませて参考にさせて「」る』

「わたくし、ご主人様に制作されて以来、実際に生きたヒトと対面したのは、「」主人様を除けば抱き枕様がはじめてなので「」ぞいます』

「……あー、そういうかい。

悪う「」ぞいたね、参考にする甲斐もない、ちんけなサンプルで

……。

つていうか、この塔、普段、人の出入りってないのか？』

『当然だろう。

なにせここは、わたしが研究三昧に耽るため、俗世間との交渉を絶つために建造したんだから』『『さんざん偉そなことついて、やつてこなことばくわいもつなかよひー』

## 5・ぼくのかんがえたこきょうわい。

「抱き枕が塔内に案内に飽きたそつなので、今日はこれから抱き枕の当座の着替えをみんなで考えてみたいと思う」

「なんだよ、朝飯食べながら唐突に。あんた思いつきでしゃべつているだろ?」

それに、おれ……抱き枕で固定なのね、もう……」

「唐突に、というわけでもないぞ。前々から、昔に暇と酔狂に任せて作ったはいいが使うあてがない武器や装備品のテストをしたいとは、思つてはいたんだ。」

「今までは、いい実験台<sup>モルヤツト</sup>がいなかつただけで……」

「なんで武器や装備品に実験台<sup>モルヤツト</sup>が必要になるんだよー。」

「いやなに。」

調子に乗つて魔法効果やなんやらを付加していくつたり、作つているわたしすらも空恐ろしい代物になつてしまつことがしばしば……。

あつ。いや。なんでもないぞ。うん。

多少、風変わりなところがあるとはいえ、ごく普通の、それどころかむしろ性能がよくて使い勝手のいい品ばかりのはずだ。

例えばこの伝説の悪鬼シリーズなんかは、兜から脛当でまでを同じシリーズで揃えるとなんと力が一気にマックスまであがる。

そのかわり、妙な威圧感が醸し出されて誰もそばに近づけなくなるのが難といえば難なんだが……。

あと、性能では悪鬼シリーズに今一歩及ばないものの、この剣道着シリーズも平均的にパラメータをひきあげてくれるでお勧めだ。煮染めたような汗の匂いさえ我慢できれば、なかなかの掘り出しど物だぞ」

「どっちも駄目じゃん。

おれ、性能のために日常生活を犠牲にする趣味はないし、それ以

前にそんな重そうなを着込むと動きが鈍くなりそうなんで、お断りします」

「そういえば抱き枕は、発見したときも信じられないくらい軽装だつたし、武器らしい武器も短刀くらいしか持つていなかつたな。

「冒険者というのは、普段からあんなもんなのか？」

「冒険者にもいろいろいるんで、全般がどうとかは軽く決めつけられませんがね。

おれだけのことに関留していえば、基本的に武装はナイフ一本。たまに、必要に応じて弓を使うくらいですかね。

「ゴテゴテと重いのは趣味じゃないもん」

「そうか。では、甲冑や兜の類はいらないか……。

ひょっとして、楯もか？」

「楯も、あまり……。

あんな邪魔くさいもの持ち歩くより、攻撃なんて避ければいいじやん、とか思つちまうもんで……」

「つむ。

抱き枕は、見た目の通り速度重視の軽戦士タイプなのか……。では、こんなのはどうだ？」

「……なんなんすか？」

「この、羽の生えたサンダル……」

「これを履くと、空を飛べる」

「凄いけど、意味ねー……。

狭いダンジョンの中ではかえつて不便です。  
もつと普通のでいいですよ」

「注文が多い奴だな……。

ええと……このナイフなんかどうだ？ 柄の突起を押すと刀身が

飛びだすという……」

「避けられたり相手が硬くて刃がたたなかつたりしたら、それで終わりじゃないですか。

「発想はともかく、実用的ではありませんね」

「む。

ではこれは。

常時刀身に即効性の毒薬が流れでる仕掛けで……」

「そんなもん、手入れするのにもいちいち神経を使いそりでいやです」

八時間後。

「はあ、はあ。

いろいろと注文が多いなあ、抱き枕」

「というか、そっちがおかしなものばかりだしてくるからですよ。いつもにしてみれば命を預ける道具なわけですから、変なところで妥協して後悔したくないだけです。

光つたり火がついたり凍つたりビリビリしたり、とかいった余計な機能はなしにしておいてください。

シンプル・イズ・ベストです」

「これでも作るのが難しいんだぞ、その手のは……。

各種エレメントを武器の中に封じる仕事ができる場所は、大陸広といえども、ここを除けば数えるほどしかない。

そうした仕掛けを除けば、武器なんて単なる鋭利な金属片にすぎん

「剣だつてナイフだつて、普通の武器は鋭利な金属片です。

それ以外のものの方が異常なんです！」

「そうかいそうかい。

では、とびつきり切れ味がいいのを出してやるつ。ほれ。

こいつはな、切れ味を追求するあまり、少々刃が脆くなってしまつてな。力のかけ具合がちょっとズレただけで刀身が折れてしまうという、扱いに困った逸品だ。

持ち手を選ぶ分、性能は折り紙つきだぞ。腕がいい奴が使えば鋼の塊だつて斬れる」

「やつやつ。おとむのもあるじやないですか。やつこのでいいんですよ。

試させてもらひでいいですか？

ええと。

たしか、打撃を受けると全面にトゲトゲが飛び出す甲冑って、こいつでしたよね？」

「ああ。

そいつ……」

「よつ」

シャキン。

「……だ……が……」

「ほつ、と」

ザクッ。

ドサ。

「うん。

なかなかの斬れ味ですね。これなら、実用上、なんの問題もありません」

「……おい、抱き枕。

お前……。

今、なにをした？

「見てわかりませんでした？」

「ああ。素人さんには早すぎて見えなかつたか。甲冑に近づいて西断しただけですが、なにか？」

「ええつと……」

「それは、刺激を受けた甲冑が突起をだす時間も『えず』……」

「『えず』みえても、速度が身上の軽戦士でしてね。おれ。

条件さえそろえればこの程度の芸当は、普通にできます」

「惜しいな……」

「メイド服姿でなければ、結構決まつていたのに……」

「メイド服つてこうなあつ！」

## 6・おでかけのじゅんび。

「ついに吹雪がやんだ」

「おお。ついに！」

「ようやく、町に帰れる！」

「ちょっと待て、抱き枕。

帰るのはいつこうに構わんのだが、そのメイド服のままではいろいろと都合が悪くないか？

お前さん的に

「ああ。

そういうや、当座の着替えを探してもらつたけど、塔の中にはヘンテコアイテムばかりでまともな服がないことが判明したんだっけな……。

「」のナイフは、なかなかの収穫だつたが……

「もしよかつたら、わたしの服を貸してもいいんだが、……」

「あなたの白衣とか魔法使いの長衣とか、おれが着ると裾を引きずるんだよな。

第一、町中でひとめで魔法使いとわかる服装をしていたら、なにかとトラブルに巻き込まれそうだし……」

「外では、まだまだ魔法使いは迫害されているのか？」

「迫害、とまではいかないけど……警戒は、それでいいかな？」

圧倒的に人数が少ないし、一般人には逆立ちしてもできない奇跡をあつさりと起こしてみせるし……。

危険視されている分、報復や反撃をおそれて直接手出しをされることはまずないんだけど……逆に、魔法使いにしか出来ない仕事をいきなり往来で頼まれたりする

「ふむ。

それで、下手に断つたりすると、トラブルになる可能性があるか

「本物の魔法使いが魔法使いの格好してうろついているんなら、な

んの問題もないんですけどね。

魔法を使えない者が魔法使いの格好して町中をうろついてるが、どうぞいちやもんをつけてくださいって看板を担いで歩いてるよつたなもんです。

「それは、困ったな。

わたしは、塔のまわりの森までなら問題はないのだが、人の多い町中までは出られないし……」

「ええっと……それはまた、どうして？」

その昔、悪いことでもして、指名手配でもされているんですか？」悪いことは今も昔も数えきれないほどしているが、いつも身バレしないように心がけてるので指名手配はされていない。

「このわたしが、そんな下手をうつわけがない」

「そんなところで胸を張らないでください」

「問題は、だな……。

その……町中、だぞ？ 人がいっぱいいるじゃあないか？」

「いますね。

町中ですか？」

「怖いだろ？」

「なにが？」

「だから、人が」

「……なんで、そうなる？」

「だあーかあーらあー！」

わたしは、他人が怖いの！

そのために、こんな塔まで造つたってんですか？」

「マジで？」

そんな理由で？

「こんな……デカい塔を造つたってんですか？」

「マジマジ。大マジ。」

筋金入りの引きこもりを舐めるなよつ！」

「だから、そういう情けないところで胸を張らないでくださいって。

はあ……。

呆れればいいのか、笑えればいいのか……。

では、そちらの木偶人形におれの着替えを買って来てもらうというの?」

「わたくし的にはいつこうに構いませんが、わたくしのようなモノがいきなり町中に現れて普通に買い物とかしたら、町の方々がたいそう驚きなるのではないでしょ?」

「そうだった。」

普通のゴーレムでもかなり珍しいのに、人間とほぼ同じ大きさで、しかも普通にしゃべる木偶人形とかが買い物にいったら……たしかに……それはそれで、騒動になるな……」

「では、こういうのはどうだろ?」

抱き枕が、そのメイド服のままでいつたん着替えを調達してくる。というか、これ以外の方法はないのではないか?」

「……あー……。」

あんた。

「なに、にやけているんですか?」

「なんなら、わたしのメイク道具も貸してやるぞ。」

なに、お前さんは、そこいらの娘つ子よりよっぽど可愛らしい顔をしているんだ。自信を持つていい。通りすがりの人から見たら、絶対、お前さんがスカートの中に大層なモノを装備しているとは想像さえしないはずだ

「褒められているんだか貶されているんだかよくわからないコメントどうもありがとうござります。」

念のために聞きますが……この塔に、メイド服や魔法使いの服以外の服は……」

「ないな。皆無だ。」

わたしは、この服を着ているか、さもなくば全裸かの二択だ

「そういうや、寝るときも下着まで脱いでいたな、この人……」

「お前さんが来るまでは食事時でも全裸でしたがなにか?」

「 どうか、魔法とか研究をしているとき以外、特に服を着る必要性を感じないのだよな。」

「 自分の周囲の空調その他の環境整備は、魔法を使って常時、快適な状態を保っているし」

「 駄目だこの人、早くなんとかしないと……」

7・ルルが、ひとちがことこのじにれておこなわれ。

「うう。 わみい」

「凍死しかけた夜を思い出すぜ」

「しかし、まともなブーツがあったのは僥倖だな。しかし、これ、なんで出来ていいんだろ？ 革よりもずっと軽いし、そのわりには、水や雪もしつかりはじくし。

……これで、色が螢光ピンクでなければ文句はないんだが……」「いや、魔法関係のことに関しては、考えるだけ無駄か。どうせ、説明されてもよく理解できんし」

「しかしあ、この町もひれしぶりだが……どうか、知り合いで会いませんように」。

「こんな格好しているところを誰かに見つかったら……」

「シナク！ シナクじゃないか！」

「あくつ！」

……だ、誰のことだ？ わにましようか？

わ、わたくしは通りすがりハウスマイドで？ わこまますがおほほほ

ほ

「あう。 女だ。

どうもどうも。 人ちがいだつたようですね。失礼しました。

いや、顔つきといい背格好といい、お嬢さんがシナク・チングと  
いう知り合いの冒険者に瓜一つなものとしてね。

いやあ、それにしても、見ればみるほどそつくりですなあ。  
わははははは。

シナクの野郎、前々からチビで女顔だとは思つていたが、女だつたら即座に押し倒してはいる可愛らしい顔をしてはいるのだが、そんなやつがメイド服とエプロンドレスをつけると、ちよつと、お嬢さんとそつくりなわけです。

わはははははは

「わ、わたくし、『主人様にいつけられた用事がありますので、  
ここで失礼させていただきますねおほほほほ」

「はあはあ。

「見えなくなつたか……」

「……あの筋野郎。

本人の前でないからつてチビだの女顔だのといいたい放題いいや  
がつて。

……あとで泣かしてやろ!……」

がしつ。

「クンかクンか」

「うわつ！」

「シナクの匂いがする」

「つて、なにいきなり後ろから抱きついてい……る、るる。  
いるんですかっ！ あなたはっ！」

「シナク、ひさしふり。

なんでシナクはスカートをはいているの？ 新しい趣味にめざめ  
たの？」

「シ、シナクつて誰のことじございましょう。

わたくしは『主人様のいつけでおつかいをしている通りすがり  
のハウスマエイド』じござります」

「うー。

わからないけど、わかつた。

今のシナクは、シナクじゃない

「そうそう。

人ちがいでござります。

そ、それでは、わたくし、先を急ぎますのでこれにて失礼！

「はあはあはあ

「なんだつて、今日に限つて立て続けに知り合いと遭遇するんだか

「しかしほまあ、魔法使いつてのは、なんでああもわけがわからんやつばっかりなのか。

あいつといい、塔の人といい……」

「はあ……。

まあ、いいや。

用事を済ませてさつさと帰るわ……」

「あー……。

本当だつ！ シナクにそつくりなメイドさんがいたあーー！」

「これこれ、コニースちゃん。

人様を指さしては駄目だよ

「……またかよ、おい……」

「やあやあ。お嬢さん。

われわれは夫婦で冒険者をしてこるコニースヒーラーというものでね。

さつき、たまたまいきあつた、やはり同じ冒険者仲間から、ここ数日姿を消している知り合いにそつくりなメイドさんが市場の方に向かっていったというタレコミがありましてね

「ちょうど、買い物する用事もあつたし、市場で会えればいいねーつてはなしていたところなんです」

「その冒険者の方つて、こーんなに『カバトルアックスを担いだよく笑うマッチョ体型の方ですか？ それなら、先ほど確かに声をかけられましたが。

ええ。

顔が怖いのでそつそつに逃げ出してきたところです」

「そうそつ。おそらく、その筋肉ダルマの斧使いで間違いないでしょ。う。

ところで、シナクにそつくりなメイドさん。この辺でみかけた覚えがありませんが、どちらのお屋敷にお勤めでしょ？

「じりー！

ヒーラーくん、初対面の人にいきなりつっこんだ質問するなよー

「あつ。こや。

」の辺に不案内なよつなり、道案内のひとつもじよつかと……」

「嫁さんが横にいるのに堂々とナンパしておるのかー！」

「あ、あの。

わたくし、先を急ぎますので、これで失礼させていただきますねおほほほほほ」

「はあはあはあはあ

「レニーの野郎、あれ、絶対、勘づいてるよな……。

いや。まったく疑つてないコニスやあの程度のことでもまかされるバッカスとかが例外的にアホすぎるのか。

……ってか、普通、見分けられるだろ？。見慣れた仲間の顔くらい……」

「ちょいと、そこのお嬢さん」

「（つたぐ、今度はなんだよ）は、はい？  
わたくしのことですか？」

「お時間があるようでしたら、お茶でも……」

「単なるナンパかよーっ」

ドガツ！ バキッ！ ガスツ！

「はつ。

思わず半殺しにしてしまった

「だ、誰にも目撃されていないよな」

「すまんな。ナンパ野郎。あんたは運とタイミングが悪かった。ついでに、人を見る目もなかつた」

「おれはさつさと用事を済ませて帰るから、お前はここでゆっくり寝ていてくれ。命には別状はない……と、思う。

それに、ここならすぐに誰かが取りかかって、介抱してくれるだ

「うう

## 8・とうへのきかんと、とうからねのきかん。

「おし。

必要なものは、一通り買い揃えたな。

店の人がなんか人の顔をジロジロみていたが、メイドが男物の服を買つても別に問題はないよな、うん。使用人が主人の言いつけて買い物に来ることは、よくあることだし、念には念をいれて、今まで入つたことのない店を選んだし

「さて、さつさと着替えて男の格好に戻りたいところだが、町中だとそういうものいかないか。

押さえている宿屋には、この服装では帰りたくないし。いつたん塔に帰ろ!……

「つと。

ここまで人通りのないところに移動すれば大丈夫だろ!。

あー、あー。

ゴシュジンサマコノアワレナメシツカイメヲドウカオクリカエシテクダサイマセ。

畜生。

わざわざこんなクソなキーワードに設定しやがつてあの性悪魔女

め

『念のためにいつておくが、聞こうと思えばこちらはお前さんのひとりごともすべて聞こえるのだがな。内耳に通信装置を埋め込んでいる関係上、お前さんが耳にした音声はすべて拾えると思っていい。それと、このわたしがせつかく考えてやつた素敵キーワードだ。棒読みせずもつと感情を込めていうよ』

『おれにプライバシーはないものか。

それと、そんだつたら別にキーワードなんか決める必要はないだ

ろう!』

『音声を拾えるといつても、四六時中監視しているほどいちも暇ではないんだ。日常生活ではまずいつのないセリフをお前さんのが声でいわれたときだけ、アラームが鳴るよつに設定している。だから、キーワード自体は必要だ。』

……それ以外の音声はゆつくり楽しむために録音しているだけだ

……  
「なんか最後に不穏なことほそつと小声でつけ加えたよこの人つー…『気にするな。後でお前さんの言動をチェックして個人的にニシニシするだけだ。』

『気にするな、というのが無理なら、治療費の一部だと割り切れ』  
「ま、いいですけどね……。」

なんか、あんたには逆らつても無駄なような気がしてきたし……。  
それより、人が来る前にわっさと塔に帰してください』

「ほいよ

「わつ！

いきなり、一瞬で移動するからな。

いつまでも慣れないなあ、こいつには……。  
と……までよ？

この空間ナンタラを使えば、直接おれが借りている宿の部屋まで  
行けたのでは？」

「試してやつてもいいのだがな。

転送先の正確な座標がわからない場合は、かなり危険だからお勧  
めはしない。

最悪の場合、かの有名な石の中のにいる状態に……』

「なんだかよくかわらないが、危険だといつのならやめておくのが  
無難なんでしょう。うん。

それではおれは、さつそく着替えてきます。

……つて、なんでついてくるんですか？」

「ここまで面倒見てやつたんだ。生着替えてくらじ見させてくれても罰  
はあたらぬだろ？』

「おれの隅から隅まで、それこそ贋物の中身まで知り尽くした人が  
なにいつているんですか。

さあ、出ていつてください」

ズリズリズリ。

バタン。

「本当になんなんだろうな、あの人は……。  
いまだに性格が把握できん」

「ふう。

やつぱり、この格好の方が落ち着くな。  
さて、と。メイド服も畳んで、と……」

「おう。

抱き枕が男物の服を着ている。

いや、これはこれで、新鮮でいいな」

「おれがメイド服を着ている方が異常なんです。

とりあえず、この服はお返ししておきますね。

それから、早速ですが、もはやおれがこの塔に居続けるべき理由  
はありません。今すぐにでも退去したいと思います。

もちろん、命を助けていただいた恩は恩として、必ず返しに来る  
つもりです。

そのためにも、はやく以前の生業に戻つて仕事に精を出したいと  
思います

「そうか。借りとか貸とか、そろそろ気にしなくてもいいのだが  
な。お前さんがそういうのなら貸しにしてもいいのだが

「それでは、これ以上お手を煩わすのも気が引けますので、おれは  
歩いて町に帰ります」

「予想していたよりも、あつさり帰してくれたな

「まずは、ギルドにいくか。

報酬がいくらか残つていたはずだし、まずはそれを精算して貰つ

て……」

「あ。シナクさん。おひさしごりです。無事だつたんですね。

（数日、顔を見せなかつたからソロ中にへまをしてお亡くなりなつたが、吹雪でどこかに足止めされてゐるのかつてみんなで噂してゐたところなんですよ）

「後者はともかく、前者は縁起でもない噂だな。

実際には、あー、吹雪で足止めくらつていたことは確かだな。ええつと、今田はだな。まだ受け出していくないおれの成功報酬があつたと思つんだけど、その精算をして貰いたくて……」

「はい。

で、いかほどい入り用ですか？」

「全部」

「へ？」

「だから、全部。

こつちを留守にしてゐる間に、出先でへまをして大きな借りをつくつちまつてね。その埋め合わせをしなければならないんだ」

「え？ あ、あの……。

「ちょ、ちょつと、お待ちくださいね……。

すいませーん、ギルド長おーー！

シナクさんが全額……」

「なに？ ちょつと待てよ、おーい。ギルドにはそんな多額の現金は置いてないぞ。

「誰か、両替商に使いをだせ！」

（……すいぶんと、待たされるなあ……）

ズリズリ。

「よつ……と」

「ミスリルのインゴットつて、結構重いのな。金貨換算だともつと重くなるつてはなしだつたし、しかたがないのか。

しかしあれ、いつの間にか結構、ため込んでいたんだな。

さんざん待たされたあげく、両替商の店長が出てきて明日までには全額揃えるから、今日のところはこれで勘弁してくれって土下座までわれちまつたもんな。

別に急がないし、金貨が無理ならレアアイテム換算でもいいよ、つていつたらギルド長ともども涙流して喜んでいたけど。

おお。久しぶりの宿屋だ」

「おや、シカクせん、おいで帰ってきたね。部屋はまだちゃんと取つてあるよ。」

「ありがとう、おまちせん。

これでまた先払いしておいてね

おや 金貸だし 何いふべと云拂りかしれ  
しづめりへ顔をみなことと思つたら、またソロで深ことじるぬまで潜つ

「ああ、それならいい。

あとで部屋に飯とお茶、それにお湯、もつてきてくれる「

「あいよ。いつもの通りね」

ドサッ。

「  
」

「いつもの通り、いつもの通り。」

この種のものについては、以前の「硬貨」の「ヘタリ鉛

どきつ。

「そいつはよかつたな」

裸で降つてきやがりますか

「お前さんがようやく一人になつたようなのでな。通信機の位置から安全な座標を割り出して、移転してきた」

アーティストではなく、だな……」

「お前さん、抱き枕としての役目が、まさかあれで終わつたとか思つていやしないだろ？」「」「」「……」

ガチャ。

「シナクさん、いいかい？

お食事とお茶とお湯、ここに……あら？

シナクさんの上に、裸のベピンさんが……」

「宿屋の人、勝手にお邪魔させてもらつてこる」

「あらあら。

若いっていいねえ。

わたしはなにも見なかつたし、このことを誰にもいませんからね。

「うだよねえ。シナクさんも童顔だけど若い男の子だもんねえ。」「うじうじもあるよねえ。

そこらのベッピンさん、もうひとり分、お食事の用意しておくれ？」「それには及ばない。

「食事は塔ですませてきた。あとは寝るだけだ」

「そうかいそうかい。

シナクさんをよろしくね。シナクさんも、この人のことちゃんと

大事にするんだよ。

それではあとは若い人同士、「ゆつくり」バタン。

「あつ……あつ……あつ……」

「やつぱりお前さんの抱き心地は最高だな、抱き枕。ん？ どうした？ 先ほどからフリーズして。体が麻痺しているような食事もわたしが食べさせてやるうか？ なんなら、口移しでもいいぞ」

「なんじや」「いやーーー！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1175z/>

---

orzの魔法使い

2011年12月27日19時49分発行